

チンギス・カンの前半生 その7
－ナイマンとタイチュートへの攻撃－

Former half-life of Chinggis Qan No.7
－Attack on the Naimans and the Taichut－

2020年7月13日

Jul.13,2020

安田公男

Kimio Yasuda

URL : [chinggis-ff](#)

はじめに

1196年のウルジャ河での戦いで、テムジンとオン・カンは、金国に追われたタタルの一部族を征討し、金国より称号を与えられた。金国と友好関係を結び、タタル部族の征討を委託されたと考えられている。しかし、その戦いに移る前に、両部族とも問題を処理しなければならなかった。テムジンは部族内の敵対勢力となったジュルキン氏族があった。オン・カンには北方からの脅威、メルキト部族があった。二人ともそれぞれの問題を解決し、部族の立場を安定なものにした。それ以降毎年のように他部族への攻撃を行い始める。それらが終わりかけた頃、必然のように両雄並び立たなくなった。それに打ち勝って、テムジンが全遊牧種族の上に立つチンギス・カンとなる。それまでの前半、ブイルクのナイマン部族への攻撃とタイチュート氏族の併呑をここでは取り扱う。

1. 史書の内容

1199年以降の各史書の記述は、かなり内容も年次も一致し始めるが、なお、細かい差はある。集史の記述を元にそれらをまとめた。

1. 2 1199年から1202年春の記事

項目	年次	記事内容(抄)
1	1199	テムジンとオン・カンが1199年にブイルクを討った。(ナイマンの君主の称号、ブイルクの兄タヤン・カンとの関係の記述あり)。アルタイ山付近のキジル・バシに侵攻すると、ブイルクはキルギスのケムケムジュートに逃げた。 その将イェディ・トグルクが向かってきた。山の上に逃げた彼を捕らえた。
	冬	ナイマンのкокセグ・サブラクがバイダラク・ベルチルで迎え討って来た。(彼の名の説明、バイダラク地方の説明あり。元史、親征録はкокセグとサブラクの二名とする)。一戦交えた後夜になったので、明日再戦を約した。オン・カンは夜かがり火を焚き、テムジンを置いて逃走した(秘史、親征録はカラ・セウル河方面へ)。この時ジャムカはオン・カンに自分とテムジンの忠誠心の差を例え話で言った。先に捕らえられて同道していたトクトアの弟クド等は逃走し父親の元に向かった。テムジンはオン・カンに逃げられたが損害無く退去し、サーリ・ケールに至った。オン・カンはタタク・トーラに到った。セングンとジャア・カンボはエジル・アルタイでкокセウ・サブラクに急襲されて財産一切と馬群家畜を奪われた。サブラクはオン・カンとの国境に進み、その辺りの族人を追い払い、テレット(秘史はテレゲトゥ)の狭間の家畜を追い払ってから直ちに戻った。イラカとジャア・カンボは単身逃れてオン・カンの元に帰った。オン・カンはイラカに軍を与え追撃させた。又、状況をテムジンに知らせ救援を求めて来たので4将軍を派遣した。イラカはкокセウ・サブラクを追って戦って(親征録はクラハ山でとする)、敗れて虜になりそうであったが、4将軍が到着して救った。
	冬	バルグジンに逃げていたメルキトのカン、トクタイが又出てきてたとの知らせがあったが、カサルと相談し、この知らせの信頼性は薄いと判断した。(親征録はテムジンがメルキトを討った、とする。元史にはこの記事無し)。
		(親征録、元史)しばらくしてカサルと共にクランジャンザ山でナイマンと戦って大勝し屍を積み上げ、軍を還した。ナイマンの力は弱まった。
2	1200 春	オン・カンとサーリ原野でクリルタイを開いた。この時オン・カン側はテムジンを捕らえようと思っていた(元史、親征録、秘史に無し)。
3		二人はタイチウトのアンク・ハクチュラの征討に行った。この時メルキトの

		トクタイベキは二人を使わしタイチウトに援助を求めている。
4		オノン河のタイチウトを攻め下した。タルグタイを捕らえて殺した。アंक・ハクチュらはバルグジンに逃れた。
5	1200 冬	タイチウトの残党はカタギン、サルジュウトに行き、ドルベン、タタル、コンギラト諸部と連盟してテムジン、オン・カンと戦うことを誓った。
6		テムジンとオン・カンはデイ・セチェンの通報によりこれを知り、オノン河近くのクト澤より出動しブイル湖で破った。
7	1200 冬	オン・カンはケルレン河より移牧シクバ・カヤに向かって進んだ。ジャア・カンボらが兄への不満を言ったのが漏れ、ジャア・カンボらはナイマンに逃げた。オン・カンはクバ・カヤで、テムジンはチェクチェルで冬営した。

2. 考察

2.1 ブイルク領侵攻作戦

2.1.1 戦いの目的とブイルクの居た土地

モンゴルとケレイト軍が、真っ先に征討に向かうべき先はタタル部族であったが、先ず攻めたのは、トルコ系であるナイマン部族のブイルク領であった。彼らは現在のバヤンホンゴル県からゴビアルタイ県方面にいた。当時この地はキジル・バシ（赤い頭）と呼ばれていた。トルコ系住民がかぶっていた帽子の色に由来する(1)。ナイマン部族の本領はアルタイ山脈の東、今のホブドを中心地とした辺りと考えられ、治めていたのはタヤン・カンと言うブイルクの弟?であった。二人は非常に仲が悪かった。ブイルクはキジル・バシの地へ移り住んで、独立した部族経営をしていた。ここを真っ先に攻めたのは、他部族を攻撃する場合、彼らに背後や横合いを突かれる恐れがあり、地理的にも力量的にも攻めやすいとの判断があったと思われる。

2.1.2 戦いの様相

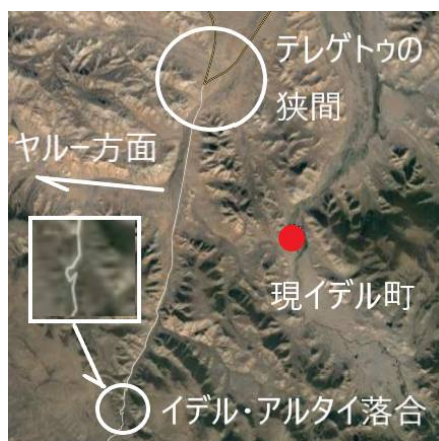
ブイルクは大した抵抗が出来ず、領土を蹂躪されっぱなしだったようだ。彼はウルク・タク（現在のイフ・ボグド山）を越えて南の砂漠に逃げた。モンゴリア中央部からキジル・バシに進むには、オルホン河を南に進みハンガイ山脈の東南を回って、現在のアルバイヘル経由で向かう方が、帰路のイデル河経由より距離は短い。この経路は水草に乏しく大軍では通行しにくかったが、ブイルクの惨敗ぶりを見ると、予期しなかった方角からの攻撃だったように思え、この道を攻撃路とした可能性が高い。帰りは冬になるので、距離は遠いが水草に恵まれた、イデル河経由でハンガイ山脈の北を目指したのだろう。

帰路についたテムジン、オン・カン軍に、コクセウ・サブラク將軍率いる一隊が、バイダラク・ベルチルで向かってきた。場所は、バヤンホンゴル市の北西にあるザグ (Zag) という町の少し東、バイダラク河とザク河の合流する地点である。彼はタヤン・カンに属する武将で既にかかなりの年配だったようだ。同じナイマン部族の土地が荒らされるのを見かねて援軍を出したのだろう。夜にな

ったので翌日の対戦を約したが、オン・カンが夜中にかがり火を多く焚いて駐軍しているように見せかけ、テムジン置いて逃亡した。コクセウ隊がテムジン軍より兵数が多ければ友軍を失ったテムジンに戦いを仕掛けただろうが、その記録はない。コクセウ隊の数はかなり少なく、テムジン軍も付け入る隙を見せなかったのだろう。ウリヤスタイまで約 300km あるが、途中オン・カン軍とも合流して対峙したまま無事に着いた。

ここからイデル河方面は溪谷地帯となり道は狭まる。その途中に、イデル・アルタイの落合がある。図 1 に示した (2)。そこで、コクセウ・サブラク隊はイラカ、ジャア・カンボ隊 (IJ 隊と略) を襲い、馬や家畜などの財産を全て奪った。IJ 隊が撤退する軍の最後尾であったからだろう。恐らくオン・カンは、バイダラクでテムジン置いて逃亡したのを心苦しく思って、テムジン軍を先に行かせ、自分たちが殿軍を引き受けたのだろう。敵に背を向けて進まねばならない殿軍の役割は難しいが、狭い道だから追撃側は後ろから攻撃しても大きな戦いが出来ない。IJ 隊は意外と守りやすかったのではなかろうか。この落合は折れ曲がっていて、峠道であることを示している。ここがナイマンとケレイトとの境になっており、イデル河方面はケレイト部族の領域だったと思われる。落合を越えた IJ 隊は自領域に入り、コクセウ隊の攻撃が弱くなったので安心したはずだ。後ろからは攻撃されにくい地形なのである。正にその時を狙ってコクセウは襲ったのに違いない。背後からではなく、西から分隊を回り込ませて横合いを突かせたはずだ。この場所で完勝するにはこの戦法しかない。GMap 上に、そのような西からの細い道が見える。

図 1 イデル・アルタイの落合と、テレゲトゥの狭間



コクセウはそこから北に進んでテレゲトゥの狭間に至った。この狭間とは図 1 に示すように、イデル・アルタイの落合を、北へ 30km ほど進んだ 48.33N97.27E 地点であろう。南のウリヤスタイからは狭い峡谷地形だったが、ここから北へはイデル河周囲に比較的開けた土地が広がる。溪谷地帯へと道が急に狭まるので、テレゲトゥの狭間との地名がついていたと思われる。落合から 30km あり、半日の距離である。コクセウ隊が家畜を追い払って直ぐに帰ったのは、テムジン、オン・カン軍の本隊に接近し過ぎるからだろう。

コクセウ隊は、自分たちの領土を侵した敵に一矢を報いることができ、家畜も財産も手に入れて十分な戦果を得たとして帰路についたと思われる。しかし、そこからまっすぐウリヤスタイ方面に引き返すことはなかっただろう。テレゲトゥの狭間からは 2 つの進路が考えられる。一つは北方のテルメン (Telmen) 湖方面に向かう路と、二つ目は西にヤルー (Yaruu) の町を経る路である。北に向かえば東から狙われるので、ヤルー方面を選んだであろう。

本隊に逃げ帰ったイラカは、奪われた財産を取り返すべく、追撃軍を構成してコクセウを追った。史書通りに読むと、本隊は既にトーラ河に着いていて、そこから救援隊を出したように受け止められるが、そんなことができるはずがない。いくら進んでいても軍の先頭はチョロト河付近だろう。

イラカは追いついて戦いを挑んだが、乗馬を倒されて再び危機に陥った。イラカは猪突猛進形の性格だったようで、老練なコクセウにいなされて、包囲されてしまったのだろう。追いついたテムジンの四将が彼を救出したが、その地を、秘史はフラアン・クトとし、親征録ではクラア山での事とする。更にこの後、クラン・ジャンザ山でテムジン、カサルが勝利し、敵の死体を山積みにしたとある。だが、これは集史、秘史にはなく、元史、親征録の記事である。特に後者の書き方であると、メルキトを討った後であるので、年をおいて生じた別の戦いのことのように思える。元史にはメルキトの話がなく、この戦役の最後としている。集史が、ここに赴くポウルチュに、テムジンが脚の速い馬を貸したとのエピソードを伝えていることからすると、テムジンとカサルが四将に続いたとは考えにくい。クラン・ジャンザ山の件は、四将が行ったことであろう。

図2 コクセウ隊との最後の戦いの地



こう考えていくと、フラウン・クトの地から、クラン・ジャンザ山へ戦線が伸びたとは考えにくく、ほぼ同じ所で起きたことではなかろうか。この近くで戦場になりそうな山の候補としては、ハン・ジャルガラント (Han Jargalant) 山 2,884m しかない。先に述べたヤルー町の直ぐ南にあり、なんとなく似た名である。フラウン・クトの地は、赤い樺の木の家とかの意味があるらしい(3)。だが、これはヤルー町の西にある赤い土地に由来するのではなかろうか。下図のように、ヤルーギ河が狭まった地点の両側に赤い土地があるので、「赤

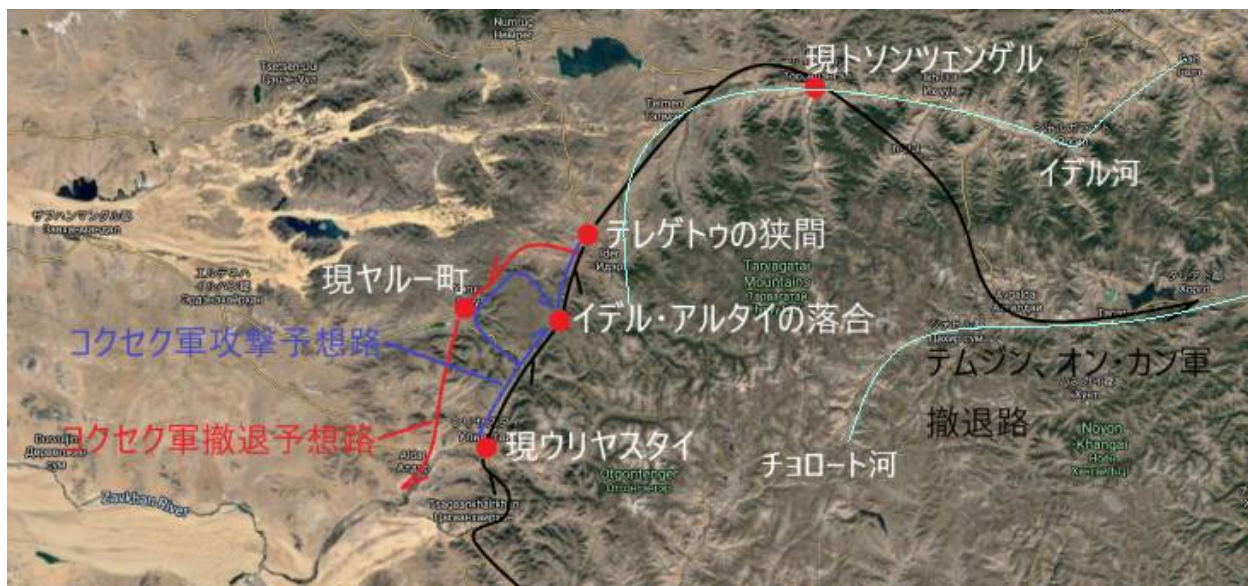
い川の瀬」のような意味だったとも考えられる。ヤルーの辺りは開けているので、逃げるコクセウ隊にイラカ隊や四人の将軍が追いつき戦場となった場所であろう。テムジン軍の戦果が華々しく記録されているが、勿論オン・カン軍本隊も加わったのに違いない。図3に各軍の動きをまとめた。

2.1.3 メルキトの動向とトンレ澤

イラカが窮地に陥ったことと、クラン・ジャンザ山の記事の間に、メルキトのトクトアのことが記されている。バルグジンからトンレ澤に出てきたのでテムジンがそれを討ったと親征録はするが、ナイマン戦をやっている最中にそんな事は出来ない。噂であり脅威にならないと判断したという集史の記事が妥当であろう。その報告が届いた場所が、この戦いの場所、即ちイデル河周辺であったのかどうかも疑わしい。恐らくトーラ河辺りに帰陣したときに得た情報であろう。

親征録だけの情報だが、バルグジンに逃亡していたトクトアが舞戻って来た場所がトンレ澤となっている。1198年と考えられるオン・カンのメルキト攻撃ではウラ河に至ったとあることと、澤の意味から考えると、セレンゲ河にウラ河（現在はウダ河）が注ぎ込んでいる所、即ち現在のブリヤート共和国の首都であるウラン・ウデがトンレ澤と呼ばれた所ではなかろうか。メルキトの中心地はキャプタであったようだが、ケレイトに押されて根拠地を奥地のウラン・ウデに移していて、そこがトンレ澤であったと考えたい。

図3 キジル・バシの地からの各軍の動き



2.1.4 ジャムカ参軍の意味

既に述べたが、この時から 20 年ほど前、父を亡くしていたテムジンとジャムカの二人は、少年期から成人するまでオン・カンの世話になっていた。オン・カンにとって二人は義理の息子のようなものであったが、成人して元の部族に帰った二人は仲違いしてしまった。テムジンは元の土地に住み続けたが、ジャムカは当時のモンゴル部族のカンであったジョチによってキヤト氏族の地から追いやられ、牧地を東のタイチュート側に移したようである。その後の消息は分からないが、金史に記載のある障葛なる人物がジャムカと考えられるとの見解を筆者は既に述べた。彼は金国領域の撫州近くを攻めており、その攻撃時期は 1196 年末から 1198 年の間であろうと考えられている。テムジンとオン・カンは 1196 年のウルジャ河の戦い以降、親金国の方針をとっていた。二人への反対の立場をジャムカは行動で現したように思える。オン・カンはこれを憂い、何とかして彼を親金国陣営に引き込もうと思ったのだろう。ナイマン部族侵攻作戦に彼を同行して、その中で説得しようとしたのではなかろうか。だが、彼はテムジンをそしるような言葉を述べたと各書にあるから、二人の方針に完全に同調することはなかったのだろう。だがその後の 2 年間は彼の名が出ないから、中立的な立場を取っていたように思える。

2.2 タイチュート部族の征討

2.2.1 征討の背景

ブイルクを叩いた後に向かったのが、テムジンと同じモンゴル部族のタイチュート氏族である。タイチュートは東方遊牧部族の最北方にいたので、ナイマンと同じく、タタルを狙う際に背後を襲われる恐れがあった。

テムジンとタイチュートとの関係は既に述べたが、重要なので再度触れておく。タイチュートは

モンゴル部族の2代目のカンであったアンバカイが始祖であった。彼はタタルの裏切りで金国に引き渡されて殺された。次期のカンにイエスゲイの叔父であるクトラを指名し、アンバカイの三男のカダン・タイシと戦うように遺言した。だがクトラはタタルに勝つことが出来ないままに亡くなり、間もなくカダン・タイシも亡くなった。イエスゲイ一人が武人派として頑張り、トオリルのケレイト部族長への復帰を助けるなどの成果を上げたが、タタルの悪計で亡くなった。その直ぐ後にアンバカイの長男であったアダルがカンになった。彼の方針は戦いで疲弊した部族の経済的再建で、イエスゲイ亡きキヤト氏族もそれに同調したと思われる。タタルとの関係は徐々に緩んで行き、この頃タイチュートは友好関係を持っていたように思える。タタルへの怨念は、父を殺され、アダル体制からはじき出されたテムジン一家に強く残っていた。

2.2.2 征討の決議

1200年の春にサーリ・ケールでテムジンとオン・カンが会議を開き、今年の攻撃目標をタイチュートに決めた。このサーリ・ケールはテムジン領域のサーリ・ケールではなく、オン・カン領域のサーリ・ケール、今のダシンチレン付近であり、後にタヤン・カンと対決した時に出てくる場所ではなかろうか。というのは、ブイルク征討作戦がコクセウの邪魔で長引き、馬にもずいぶん負担が掛かったはずだ。その年の冬テムジンは自領に帰る余裕が無く、ケレイト領域で冬を越したと考えるからである。春になってタイチュート作戦を決めてから自領に帰ったのではなかろうか。集史の記述だが、この会議の時オン・カンはテムジンを捕らえようとの企みを持っていたとある。例えそうであっても、オン・カン個人の考えではなく、その部下の考えであろう。彼はナイマン作戦でテムジン率いるモンゴル軍の精強さを見て脅威を感じていた。将来我が部族にとって障害になるかも知れないと思い、これを排除すべきではないかとの考えが浮かんだ。冬営中の静かな日々の中でテムジンが自分たちのケレイト領内の近い所に居るのを見ていると、思いがだんだん強くなっていったのではなかろうか。集史だけの情報だが可能性として十分にあり得る。だが、告げられたオン・カンは、その考えを斥けたはずだ。自分もそう思ったのなら実行していただろう。

2.2.3 戦いの様相

テムジン、オン・カン軍はテムジン領からオノン河を下って進軍した。この経路は河添いの狭い地形が回廊のように続き、キヤト氏族の土地とは地形的に分断されているような感じである。タイチュートのいた場所は現在ロシア領である。以前はアガ・ブリヤート自治管区であったが現在はチタ州になっている。遊牧に適した平野は、図の円で囲った部分の湖が多い平野であろう。現在は農地が広がっている。オノン河にボルジャ河が合流する地点の西辺りからオロヴァンナヤ（旧オノンスク）までに町が多く遺跡も多い。ここは東のアルグン河流域から移動してきたモンゴル部族が初期に展開した土地と考えられている。タイチュートの当時の中心地もここであっだろう。戦いでテムジンは矢で首を傷つけられ、ジェルメに懸命に介抱されたことや、かつてソルカン・シラに助けられたとき、世話を受けた娘との悲劇的な再会が感動的に語られている。だが一夜空けると敵方の兵士は逃亡し、部衆だけが残っていた。集史の記述も簡単だから、父の代から敵対してきたタルグタイ・キリルトク以下数人の首領を殺して、戦いは短時間で終わったようだ。ジェベがこの時テムジンの乗馬を傷つけ、その後降伏したという秘史の記述は小説であろう。彼の帰順はもっと早い。

テムジン、親征録はウレン・トラスの野とし、同じ部分を秘史は、オノン河の向かいに残っていた防塁としており、大きな違いがある。秘史の記述であると、ウルジャ河の戦いでタタルが籠もった防塁、即ち契丹が残した砦のような物に思えるが、タイチュートの居たオノン河中下流域は契丹長城の北にあって、契丹の防塁があるとの報告はない。タイチュート自身が作った物としてもおかしくはないが、戦いは地名で表されるのが一般的なので、先に述べた平野がウレン・トラスの野であったと考えたい。

図4 タイチュートの征討



2.2.4 アンク・ハクチュ（アウチュ・バートル）の逃亡経路

この戦いの時、メルキトがタイチュートに使者を寄越していたという。その力を当てにしていたのだろうが、あっさりと負けてがっかりしたことだろう。タイチュートの首領の一人、アウチュ・バートル（アンク・ハクチュ）はメルキトの使者と一緒にバルグジンに逃げただろう。仮にチタ、ヒロク河経由でウラン・ウデまで行ったとして、ざっと 1,000km ある。シベリアは、大地が凍り付く冬の旅の方が橇などを使えば容易らしいが、それにしても大変な移動である。アウチュ・バートルは無事に到着し、2年後のクイテンの戦いではブイルク・カンの案内をしていたようだ。メルキトからキジル・バシまでも優に 1,000km を越える。そういう連携を、バイカル湖の辺りでメルキトが考えていたのもある意味すごいことである。

2.3 諸族との戦い

逃亡したタイチュート兵はカタギン、サルジュウトに合流した。タイチュートが破れたのを脅威に感じ、ドルベン、タタル、コンギラト部も加わった。反テムジン、オン・カン同盟がここに成立した。元史、親征録によると、アライ（阿雷、alei）泉で白馬の胴を切ってテムジン、オン・カンと戦うことを誓ったとある。場所を探すと、アルグン河の側の 49.66N118.39E 地点に、阿日布拉格というのがあった（図 5）。アリ泉（ari bulag）だから、L と R の違いがある。だが、kherlen

も元は *khelren* だったらしいので、恐らくこの泉のことで、まん丸い形が、強い団結の象徴だったのである。だが、コンギラト部族にはテムジンの妻の父であるデイ・セチェンがいた。その密報で抵抗勢力が団結したのをテムジンは知り、敵の行動を待たず直ちに征討に赴いた。集まった中で大きい部族はコンギラトとタタルで、残り三つは小さい集団である。いずれもモンゴル部族ではあるが、部族の本流ではなかった。

2.3.1 三氏族の系譜

秘史が伝えるには、ドルベン氏はテムジンから 12 代ほど遡った時代にいたドブン・メルゲンの兄が祖であった。兄の四人の子達はドブン・メルゲンを見捨てて行き、ドルベン（四）氏となった。

ドブン・メルゲンの妻はアラン・コアと言った。二人の息子がいたが、夫の死後、は日月の精と交わって更に三人の息子ができた。上が、ブグウ・カタギ、二番目がブカトゥ・サルジ、三番目がボドンチャルであった。兄二人は、ボドンチャルが愚鈍だとして彼に何も与えず、身内扱いをせずに放り出した。ボドンチャルは一人で生きていたが、ウリャンハイ族の一団を捕らえようとの考えを出して、兄たちと一緒に実行して成功した。このボドンチャルがテムジンに繋がるモンゴル部族の実質的始祖であった。兄の子孫がカタギン氏、サルジウト氏になった。一代 25 年としたら、この時から約 250 年前の人物達であった。

これらの三つの氏族は、部族の正統となった人物に対し、冷たい扱いをした者達の子孫だということで、部族の主流からうとましく思われていたようだ。また、彼らも本族に強い敵愾心のようなものを持っていた。集史は、軽装の小人数で鷹狩りに出かけたクトラ・カンが、ドルベン氏の一団に襲われ、危うく命を落とすところであったと伝えている。金史の 1190 年頃の記録では、カタギン、サルジウトはコンギラトとタタルに交わり、彼らの間を自由に移動して金国に侵攻していた(4)。牧地は本族に押されて狭く食えないので、悪く言えば強盗家業を本業としていたようだ。彼らの活動から見て、その住地が西方のモンゴル領ではあり得ず、タイチュート領域の東南部に隣接した地域、現在のザバイカリスク町北方の山岳部の谷沿いではなかったかと想像する。アルグン河から西進して発展して行ったモンゴル本族に、置いて行かれた立場だったと考えたい。だが、本族と完全に敵対していたわけでもなかった。隣接したタイチュートとの関係は悪くなく、カダン・タイシの息子達と連携していた。金国侵攻で得た物資を、彼らに融通していたのではなからうか。

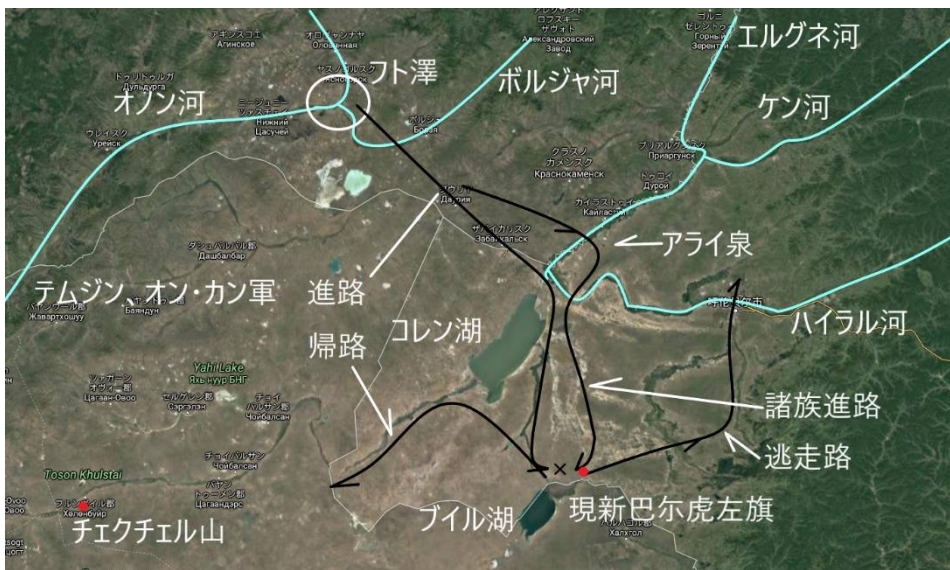
この時から数年前に、テムジンとジャムカは一緒にこれらの部族に関係修復を持ちかける使者を出したと集史にある。だが、この後の事を考えると、二人が共同でそういうことを行ったとは考えにくい。同時期に別々に使者を出したのではなからうか。その時は、ウルジャ河の戦いの後であろう。テムジンは、彼らに金国攻撃を止めさせようとしたのだろう。だが、使者は辱められた。ジャムカとのやりとりは分からないが、この後のことを考えると、協力関係が成立したと想像される。1196 年の末以降に行われた撫州近くの攻撃は、障葛即ちジャムカによるものだった。金国攻撃では集団名が伝わることが多いが、首領の名が残るのは珍しい。ジャムカが以前から金国攻撃をやっていたのなら、氏族名のジャダランも残っていそうなものだが、残っているのは首領名である。と言うことは、ジャムカは自分の名を広め、テムジン、オン・カンに反対の立場であることを明らかにしたかったのだ。地理に詳しいカタギン、サルジウトの二氏族に乗った形で遠征が行われ、

ジャムカにとって初めての金国攻撃であったと思われる。

2.3.2 戦いの場所と様子

戦場はブイル海子、又はバイレ河とあるから、諸族は、ブイル湖の側にある現在の新巴尔虎左旗近くに集結したのだろう。ここは、この辺りのタタル部族の中心地と思われる。出発したクト澤は、恐らくオノン河にボルジャ河が注ぎ込む辺りであろう。現在のザバイカリスク辺りでコレン湖の西を南下してから東進して、現在のウルシユン河を渡った辺りで戦ったのに違いない。コンギラトの牧地を通して北から攻めれば、敵の逃げ道を塞ぎ抵抗が大きくなる。とりあえず叩いておくことが目的の戦いだっただろう。これも楽勝だったようである。

図5 諸族移動図



上図の移動経路を見ると、敵の倍近くを移動して、なおかつ勝利を挙げている。タイチュート戦が短期に終わり、テムジン、オン・カン軍は余力十分だったようだが、数が多いとか、戦術がうまかっただけでは済まない要因があったように思える。金国から鉄原料を与えられて、武器や馬具が一新されていた可能性が高いとの見方がある。その見解に筆者も同意する。馬具、特に鞍と鐙が良くなって長距離移動が楽になり、豊富な鋭い鍔が敵の制圧を容易にしたのではなかろうか。

ジャムカの名は、タイチュートの征討にもこの戦いにも出てこない。1年後のことを考えると、アルグン河にケン河が合流する辺りにいて、遠くから戦いの様子を眺めていたような感じである。前年のナイマン攻撃の際にオン・カンに言い含められて、中立を保っていたのだろう。

2.3.3 兵を還す

この後、オン・カンは直ぐにケルレン河に沿って帰り始めたようである。去年のブイル湖攻撃もコクセウ隊の妨害で帰還が遅れ、今回もタイチュートだけで済むと思っていたのに、余計な戦いが一つ入った。この冬はゆっくりと自領で過ごしたかったのだろう。戦後処理などの面倒くさい仕事はテムジンに任せたわけである。ボンボンに育った二代目社長などによくあるタイプである。

集史によると、オン・カンが帰った方向はクバ・カヤに沿った道だったとあり、テムジンはチェ

クチェル地方で冬を越したとある。秘史ではテムジンがクバ・カヤで冬を越したとある。親征録では、オン・カンがクバ・カヤで冬を越し、テムジンはチェクチェルで駐軍したとある。元史はテムジンが翌年チェクチェルから兵を起こしたとある。史書の間で矛盾しているが、テムジンはチェクチェルで冬営し、オン・カンはクバ・カヤで冬営したと判断する。クバ・カヤはチュルク語で灰鼠色の岩山の意味らしい。そんな山があるのかと GMap を見たが、これだと断言できる地形はない。次のジャア・カンボの内紛などを見てると、オン・カンの自領で起きたことだったように思えるので、クバ・カヤは現在の首都近くにあったと考える。テムジンはチェクチェル山で冬営した。タタルに比較的近い場所での冬営予定だったので、オン・カンが帰りを急いだとしてもテムジンは文句を言わなかったのだろう。この山、現在のイフ・ツァガン・オンドル山の麓のフルンブイル町が、当時シラ・ケールと呼ばれ、父親イエスゲイの死の原因となった場所であった(5)。将兵は、来年タタルに向かうカンの思いを、冬営中ひしひしと感じていたに違いない。また、新たに併合したタイチュートにも、本拠地のアブジア・ユデゲリ（アウラガ）よりかなり近く、彼らを戦いに動員する為に必要な連絡に都合の良い場所であった。

2.3.4 ジャア・カンボの不満

オン・カンの帰途の中で問題が生じていた。弟のジャア・カンボが、兄の移り気なことに対する不満の心を大きくして行ったのである。その気持ちを推測すると、なぜもう少しこの場に留まって、テムジンと共に戦いの成果を確かなものにしておかないのか、という気持ちではなからうか。テムジンには自分も兄も何回か助けてもらっているのに、いつまでも自分の手下のようにぞんざいに扱う兄に腹を立てたように思われる。そんな不満を周りに漏らしたのが兄へ筒抜けとなった。昔のオン・カンなら直ちにジャア・カンボを切って捨てたと思うが、身に覚えがあったのか成長したのか、辱めただけで終わった。テムジンへの配慮か、それともケレイトを必死で守っていたこともあった彼への遠慮であろうか。だが、ジャア・カンボは耐えられずにナイマンに逃げた。これが起きたのは冬営中から春にかけての事であろう。

4. 参考文献

<史料>

『元朝秘史』無名氏：小沢重男(1995)「元朝秘史全釈、上、下」風間書房、東京

：村上正二(1970)「モンゴル秘史1, 2, 3」平凡社、東京

『集史』：『史集』(1983)、商務印書館、北京

：ドーソン著、佐口透訳(1968)「モンゴル帝国史1」平凡社、東京

『元史』宋濂編：「元史」(1976)中華書局、北京

『元聖武親征録』無名氏：何秋濤校注、文求堂蔵版(1910)、国立国会図書館近代デジタルライブラリー

<参考資料>

(1) 安田公男(2019)「モンゴル史の地名その3」HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)

- (2) 安田公男(2018)「モンゴル史の地名その 2」HP チンギス・カンとその友人たち (chinggis-ff.jp)
- (3) 村上正二(1970)「フラアン・クト」モンゴル秘史 2 巻、96 頁
- (5) 外山軍治(1964)「金朝史研究」474-475 頁、同朋舎、京都

以上

改訂履歴

2020 年 7 月 13 日 初版

